

## 第二回 岐阜城

～濃尾平野を見下ろす天下布武の城～

今回は「岐阜城」を取り上げます。岐阜城を訪ねたことのある方なら、その眺望の素晴らしさはご存じでしょう。ですが、この城周辺で起こった出来事を知った上で、城から濃尾平野一帯を眺めてみたとき、その感慨は何倍にもなることと思います。以下、岐阜城が関係した3つの有名な戦いについて、地理に重点を置きながらご紹介したいと思います。

### 織田信長の美濃攻略戦

まず、尾張と美濃の地理的な位置を見て下さい(図1)。尾張と美濃は濃尾平野で地続きであり、美濃から関ヶ原を通って近江へ抜け、琵琶湖沿岸を通って京へ至るのが最も平坦なルートとなっています。これは今でも同じで、新幹線や高速道路が同じルートを走っていま

す。信長にとって、まず隣接する美濃を取ることが大変重要であることが分かります。桶狭間の合戦の後、信長は、岡崎城の松平元康(後の家康)との同盟により東海道方面からの脅威から解放されると、美濃攻めに専念しています。しかし、それから稲葉山城を落とすのに実に7年の歳月を費やしています。当初、平野部の西美濃方面から攻めようとしたが、美濃三人衆と呼ばれた稲葉、氏家、安藤らをはじめ有力豪族の結束が固く、何度も攻めきれずに退却しています。そこで信長は、山間部の東美濃方面からの攻略に方針転換すると、居城まで清洲から小牧山へ移し、合戦・降誘を使い分けながら次第に勢力を拡大していきました。東美濃の大半を勢力下に収めた頃、ついに美濃三人衆の内応を取り付けると、信長はただちに稲葉山城下へ

軍勢を進め、城下を焼き払い、一気に取り囲んでしまいます。難攻不落を誇った稲葉山城ですが、さすがに孤立無援となっては持ちこたえられず、ついに落城しました。稲葉山城を手に入れた信長は、井ノ口と呼ばれていた城下の地を、周の文王が岐山に起こって天下を治めたという中国の故事にちなんで「岐阜」と改名しました。この時以降、信長は「天下布武」の朱印を用い始めており、天下取りへの道を駆け上がっていくこととなります。



図1

1) <http://www.kinkazan.co.jp/0000.htm> (金華山ロープウェイ)

## 賤ヶ岳の戦いと岐阜城

信長と嫡男信忠が本能寺で斃れ、明智光秀が討ち取られた後、跡目を争って、信長の孫の三法師を擁する羽柴秀吉と、信長の三男信孝らと結んだ柴田勝家との間に戦が起こりました。岐阜城で挙兵した信孝は秀吉に攻められて降伏しますが、柴田勝家が雪解けを待つて越前から南下すると、秀吉との約定を破り再び岐阜城で挙兵しました。戦上手の勝家は、琵琶湖畔の平地へ抜ける直前の賤ヶ岳北方に布陣して、南方から迫る羽柴勢を待ち受ける体勢をとりました。一部の隙もない布陣を見た秀吉は、この場を部下に任せて、信孝の籠もる岐阜城を攻略すべく美濃へ向かいます。これを知った柴田方の猛将佐久間盛政は強硬に攻勢を主張、羽柴勢の陣地を攻撃しました。そして猛攻の末陣地を奪取した盛政は、敵陣攻略後すぐに戻るといふ勝家との約束を無視して、奪取した大岩山に居座り続けます。この知らせはすぐに秀吉の下へ伝えられました。幸運なことに、このとき秀吉の軍勢は折からの雨で氾濫した揖斐川を渡れず、岐阜城手前の大垣に戦闘態勢のまま待機していました。知らせを聞いた秀吉は「我、勝てり！」と叫んだといひます。すぐに陣を引き払うと、先行して沿道の村々に松明と握り飯を用意させ、1万5千もの軍勢を、13里（約52km）を5時間という驚異的なスピードで賤ヶ岳付近へ移動させました。まさかの早さで現れた軍勢を見て、盛政は撤退を開始しますが、この隙を突いて一気に羽柴勢が総攻撃。結局柴田勢は全軍総崩れとなって越前へ退却していきました。そして、勝家は越前北の庄城に追い詰められ、自刃。有力な味方を失った岐阜城の信孝は開城し、後に秀吉らに迫られて切腹しました。辞世は「昔より主をば討つ身の問なれば報いを待てや羽柴筑前」と伝えられています。

## 関ヶ原前哨戦

徳川家康が軍勢を率いて会津の上杉景勝の征伐に向かった隙を突き、石田三成が豊臣恩顧の大名に呼びかけて挙兵、関ヶ原の戦いにつながる一連の戦いが始まりました。当時の岐阜城主は、賤ヶ岳の戦いの時にはまだ幼児であった織田信長の孫、三法師あらため織田秀信であり、石田方（西軍）についていました。西軍

は、伏見城を落とし、大津城を囲み、伊勢では安濃津城、松坂城を攻略し、大垣に拠点置いて、三成自身もここに進出していましたが、秀信は最前線で徳川方（東軍）と対峙することになりました。そして西軍の迎撃態勢が十分に整う前に、東軍の先発隊である福島正則、池田輝政らの軍勢が岐阜城を攻撃します。父祖織田信長以来一度も籠城したことがないのを誇りとしていた秀信は、岐阜城から打って出ますが、衆寡敵せず破れ、押し寄せる大軍勢の前に岐阜城はあえなく落城してしまいました。三成らの西軍は東軍の侵攻に対して後手後手にまわり、木曾川、長良川、揖斐川という天然の要害をうまく利用できないまま、簡単に長良川の渡河を許してしまいます。そして家康が美濃に着陣。西軍は、夜陰を突いて大垣城から関ヶ原へ移動、狭隘な関ヶ原に進入してくる東軍を取り囲むように布陣して待ち伏せます。そして、翌朝、深い霧が晴れるのとともに、関ヶ原の戦いが始まるのです。

## 歴史を踏まえて、いざ岐阜城攻め

現在でも、難攻不落を誇った急峻な山は健在です。徒歩で攻めることもできますが（約1時間）、今はロープウェイで一気に攻め上がることができます。山頂から周囲を見渡すと、当時信長が見た尾張、美濃の風景をリアルに想像することができます。南は尾張、伊勢方面が一望で、空気が澄んでいけば遠く知多半島や伊勢湾まで見渡すことができます。南から東へと目を移せば、木曾川、長良川、揖斐川の流れ、そして大垣を通って関ヶ原に通じる街道がよく見えます。そして、その先は京へとつながっているのです。

